

<Record> Ohara's big Zelkova Regenerative  
Shaping Community Art

|       |                                                                                                                     |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2019-03-11<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 本田, 貴侶, HONDA, Takatomo<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1215">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1215</a>               |

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 大原大ケヤキ再生造形 地域のアート

本 田 貴 侶

## はじめに

これは彫刻することを通して地域と密接に結びついた制作の展開の記録である。

この木は旧中山道与野駅東口に近い交差点の中に立つ推定樹齢500年の欅の古木であり、「大原の大ケヤキ」の愛称で親しまれ、ご神木として地域の人々によって大切にされてきた。ところが樹医さんの診断で、根元に腐りが広がりこのままでは倒木の危険があるため伐採すべきであると報告され、惜しまれながら2010年5月に伐採された。大ケヤキを守るために長年活動してきた「ケヤキ対策委員会」にとって苦渋の決断であった。しかし、長く愛された大ケヤキをさまざまな形で残そうという住民の方々の木への熱い思いは、彫刻家である私のものづくりの心を大きく動かし、地域の絆となる記念造形としての再生造形を提案し、その為に以下の3点を考慮して造形を手がけることにした。



- ① 制作は屋外で市民がいつでも見られるよう公開制作とする。
- ② 再生造形は地域の共有する空間、建物に設置され、生活の中で生かされること。
- ③ 作品のイメージや、それを十分生かしたプレゼンテーションの工夫とデザインが取り入れられること。

まず大ケヤキをその特徴を生かしモニュメントとして、どのような寸法に切断するかは重要である。切り倒された根元の一番太い部分から2m70cmのところで<sup>たまぎ</sup>玉切りした。断面の直径は2m40cmもあり、重さは約4トン。大ケヤキがずっと人々の営みを見守っていた場所に近い旧大原中学校跡地の広場の一画が公開制作の会場に定められ、重機によって運ばれた。

2010年6月28日鉋入れ式を行った。「大ケヤキ対策委員会」の方々、地域の方々、市の関係者、これまでの作業を手伝ってくれた方等々集まり“鉋入れ式”を行った。公開制作の無事の進行と安全を願い、紅白のリボンが柄に巻かれた大鉋を「エイヤー」とかけ声と共に振り下ろして“場”

を引き締めスタートした。皆さんも代わる代わる重い大きなナタを持ち上げ参加してくれた。

## 公開制作について

倒された大ケヤキの中にある、地域の人々個々にとっての風景、情景、思い出、出来事、物語などを公開制作による地域の人々との交流によって造形を媒体として展開したいと思う。

- \* 共通の象徴（シンボル）の確認と象徴としての造形
- \* 個と集団の関わりー協力、調和
- \* アートを通した人間関係の存続とアートの社会的機能の芽生え
- \* コミュニケーションの媒体としての造形

以上のことを考慮しながら大ケヤキの公開制作を行う。造形を媒体として、社会と人との関わりを展開させてくれる意義を持ち、社会性の公空間がその地域の地域性を歴史の中で広く共存させるものとなろう。

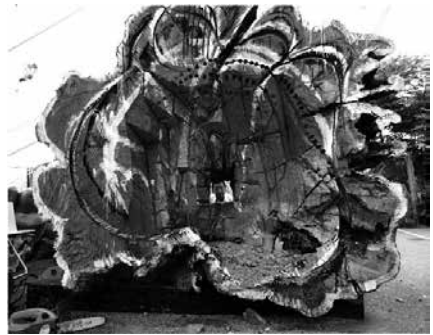
500年と言う長い歴史によって大原の大ケヤキが生み出したいろいろな物語、思い出。旧中山道の大ケヤキの下には“すだれ茶屋”があった。ここではお団子が売られ、旅人はお茶を飲んで一服し、つかの間疲れを癒やしてまた旅を続けた。このすだれ茶屋を引き継いだお婆さんが公開制作の広場の近くに健在で住んで居られた。大ケヤキが大きく豊かに緑の葉を茂らせていた頃の写真も残っていて、懐かしい武蔵野の風景を情感豊かに伝えてくれる。大ケヤキの作り出す情景はこのすだれ茶屋と一緒に豊かな自然として人々の気持の奥に息づいて蘇ってくる。大ケヤキの原木の造形を残すことでモニュメントとして思い起こされるオブジェとなっていく。

公開制作は制作の日以外に地域の方、県内外広範囲から制作鑑賞を希望する方に時間を問わず公開して交流するためのご案内をした。特に昔から大ケヤキに接した人、子どもの頃にこの大木に登り遊んだ人達が多く大ケヤキとの関係、接し方等昔話をきかせてもらった。ケヤキに登って父親の帰りを待ったこと、地域の古老から、“危ないぞ”と叱られたこと、ケヤキの皮を拾ってメンコで遊んだこと、大きな木陰を渡る風、大ケヤキが当たり前のようにある風景等々……。

## ケヤキの造形（カービングについて）

最初に、地面の水分の影響を受けないよう、また風通しも良くなるように2本の枕木をバンコとして置きその上に一番安定した位置を探して設置する。これを“<sup>ほんき</sup>本木に置く”という。この本木の位置は制作中に大きく揺れず、危険性が無く、造形的に見栄えのする角度で最良の位置である。

原木は 巾 240 × 奥行 270 × 高さ 220 cm と大きめに切り、腐った部分や落雷で焼け焦げた部分、枝等を落とし整理してから全体のイメージを朱墨でデッサンした。腐った部分はカービングし凹面の形状と凸面の形状を大きく荒造りする。円が外に張り出すボリュームと負にえぐれた部位を大きく組み合わせるようにカービングしていく必要がある。特に木表（木の直径の広い面）は大きく凹みを入れ、



一木造りを目指す為に負空間を作っていく。木裏（木の直径の狭い方の面）と左右の側面は量感のある凸面を表現していった。木表から木裏に向って空洞を進めるが、永くて硬い材を彫るのは至難の業で、この時だけは私一人では出来ず、材木店の腕力のある人に手伝ってもらい刃の部分で 2m もあるドイツ製エンジンチェーンソーで十文字に縦・横と切れ目を入れる「十文字切り」の手法で彫り込んでいった。奥へ奥へと進むにつれて芯の部位で櫓の硬さが強固になり苦戦を続けた。そして 2m のチェーンソーを十分に使い込んだ先に木裏の硬い扉が少しずつ切り取られ光が見えてきた。最後にようやく四角い空間が貫通した。丁度見学の人の顔がその“窓”からにっこりと微笑んでくれた時一木造りが成功したのだ。このケヤキは生木なのでそこに造形すると必ず干割れがでてくる。これを防いで木彫として永遠に残すためには芯を丸ごと刳り抜く一木造りの中刳りが必要になってくる。奈良・平安の仏像は立像でも座像でも中刳りしてあり、一木造りで割れること無く見事に私達に語りかけてくる。この度の最大の関門はまさしくそこにあった。貫通し一木にぽっかりと 30 cm 角のきれいな穴が開いた時宇宙のすべての風を引き寄せた気がした。ここで大ケヤキの体内に風が流れ始めた。そうして荒彫りから中彫りへと着実に進むことができた。

この度のカービングによる造形はモデリングとは素材的にも表現としても全く逆のもので、既にある現実の立体物から形を彫り出すことである。木材や石材（この材料を実材という）のような硬質材料を使い、木彫、石彫がその代表的なものである。自然の中に放置された石塊や流木を見ているとその中に形が宿っており、それをノミで彫り込んで行く。ミケランジェロは「何も私は形を作り出している訳ではない。形は向こうからやってくる。ただそれを掘り起こしているだけだ。」と言っている。この言葉はカービングの特性をよくとらえた言葉である。

既にあるものの中に形はある。外部の目、つまり作者の目が立体の表面をとらえ、内在された塊を求めて、中へ中へと実材の抵抗を乗り越えながら彫り進んでいく。最後に外的な力と材そのもののぎりぎりの競い合いの末に、木、石おのおのの形（フォルム）と質感（マチエール）が表現される。ノミの切れ味や、研磨などの地肌（テクスチャー）の処理も、材質を生かすカービン

グ制作のポイントとなる。しかし、よほど技術をマスターし、立体把握に優れた人でないと、彫りすぎたり形が歪んだりする。木彫、石彫は最後の地肌を仕上げるまで不規則なノミ跡が刻み続けられるから、表現する形を終始強く頭に入れ、またデッサンをよく取って進める必要がある。

このカービングの素晴らしさはミケランジェロの死の直前に未完成で彫り残された一連のピエタ作品に顕著に表れている。さらにカービングによる造形の特徴である凹面の空間の美は、あたかも数千年の年月にわたる荒波の浸食によってできた岩の空洞のようにえぐれた有機的形態からなるヘンリー・ムーアやバーバラ・ヘップバースの作品が物語ってくれる。

## 表現上留意した重要な視点

### ① 材質と表現

樺は木の中でも硬く強固である。削ることに適し、さらに研磨することで樺の持つ素材感を表現することができる。制作者はその材質を活かしたより良い表現をするため材質にあった制作の技法、使用する道具を選ばなければならない。この大ケヤキの場合は良く研いだノミで満身の力で振り込んで初めて硬材の抵抗を乗り越えることができる。その時の感覚は木を彫った者にだけ与えられる喜びをもたらす。

作品の効果は、その材質の持つ表面の地肌に依存するところが多く、制作においては初めから材質の特性部を予感し進めなければならない。樹齢500年のこのケヤキの樹皮には銘木として扱われるひだもく襞空と言う波のように繰り返す襞が何本も現れている。昔子ども達はこの襞を足がかりにしてケヤキに登ったとか。この襞空の効果を出すため木ヤスリで磨きだし、見事な造形がはっきり浮き上がってきた。このように、素材との出会いと語らいによって知らず知らずのうちに造形する楽しさが生まれてくる。

### ② リアリティ（現実性）から抽象化への道

大ケヤキにはモチーフとして五人の女神と一人の子どもを四方から組み合わせて配置した。これをいかに表現するか……？

具象から抽象化への道は近代彫刻の歴史的な主なる潮流であった。ギリシャ、ローマ、ルネッサンス、近代までのほとんどの時代が具象彫刻の時代で長く続いた。ようやく近代になって旧来の人体の姿をそのまま表現する彫刻から、造形の要素である塊、面、構築性、動勢、量感、地肌などを主眼とした彫刻が出現し、絵



画（二次元の空間）と彫刻（三次元の空間）をはっきり区別させた。彫刻における造形思考は、三次元の視点の確立とともにますます質的な高まりを見せながら形はより単純化されたり強調されたり変形されたりして、現実の内的な存在や感動をより強い手法で表現するようになった。

リアリズム（写実主義）からアブストラクト（抽象主義）への展開は、具象的な表現から半具象の抽象化の過程を経て、20世紀初頭の完全な非具象主義の表現に至るのである。ザッキン、アルプ、ブランクーシ等の作家が彫刻の抽象化の方向を示してくれた。その様な背景の中で、私の表現法も具象に始まり半具象（半抽象）の表現法をオブジェ化する自己の表現法として、今回は展開する。

### ③ イメージや構想の視点から

イメージや構想による表現は、発想、想像力を使って造形を展開する領域である。すなわち、具象、非具象を問わず、いかにイメージを豊かに膨らませ広がりを持つかと言うことが造形上の重要なポイントであり、芸術としての質と関わる必須条件でもある。ここでは目の前にある現実を叙述的に再現するので無く、常に感覚と思考、創造力と夢想などによって練り上げられたイメージの世界や空間をもたらすことになる。それは自然を観察し再現することとは異なり、つくり手の構想により、ケヤキを見ながら自由にイメージを広げることが出来る主観的性格（個性）の産物であり、客観的性格（普遍性）の造型産物では決していない。

子ども達の創造活動においては、抽象化、オブジェ化、構成などの種々の構想表現があるが、特にイメージ（想像、幻想）の表現は重要な位置を占めている。現在の彫刻教育においては、幼児からの造形遊びが、小学校高学年、中学校と進む中で、量感、動勢等の造形要素からくる表現と共に楽しい想像力豊かな自由な表現も行われている。自主的で自発的な想像力（imagination）の育成は、彫刻教育で特に急務の問題点である。そしてこの教育は幼児期からの連動した流れのなかで展開される必要がある。内容としては 再生的想像力の育成と創造的想像力の育成の二つに分けられるが前者は過去の経験に基づいたイメージの再生であり、後者は現実との関わりとは別の純粋な心象のイメージで、空想・幻想なども含んだものである。

この度の表現は大ケヤキの物語・思い出・出来事・風景・情景・状況と関わる視点が大切になってきた。切られた大ケヤキをどのように造形するかは私と公開制作における人々の会話が必要である。見に来た人は大人から子どもまで、いろいろな感想を述べ、また芳名録に記帳してくれる。集まった人出会った人と物語されるケヤキ、その物語されたものが記憶に残るのだ。そういう意味で作品のタイトルを「風の記憶」として後生に残したのである。立体造形とケヤキの物語を並行して見る事が出来るよう、完成後は公共の広場に設置することが実現すると思われる。

## 公開制作の場から生れたワークショップや漫画など

公開制作の場には近隣の人達が、毎日入れ替わり立ち代わり訪れた。横たわっている大木は与野駅前交差点に立っているのとは違い、目の前にあって大きさと重さを感じる。この大木がどんな風になっていくのか興味津々であった。そして今までどのようにこの木と接したかを話し、遠くを見るような目で懐かしい思い出を語っていった。この大ケヤキが大切に愛されて皆さんの心に刻まれていることが良く分かった。

子ども達の反応は直接的で、保育園児は集団で保育士の先生と、みぬま幼稚園 ひかり幼稚園と野愛仕幼稚園などの園児達、上木崎小学校 針ヶ谷小学校 木崎小学校などの児童生徒達が学校帰りに寄ってくれた。こんなに大きな木を彫っているのを見るのは勿論初めてで、“ワー大きい！”“ナニしてるの？”“さわってもいいですか？”等々質問したり、周りに散らばっている木の彫りくずを見て“これもらっていいですか？”と欲しがったり…。

樺は成長に伴い樹皮が脱皮するように剥げ落ちる。厚みのある丈夫な破片で形や大きさは千差万別、木の乾燥とともに大木の周りには樹皮がいっぱい落ちている。こども達がこの破片を見つけて遊んでいた。何をしているのかそっと見てみると、“これは犬だ！”“キリンさんだ！”“自動車だよ”と、色々なものに見立てて喜んでいることが分かった。家に持ち帰り色を塗って素晴らしい作品にして見せてくれた子もいた。

ケヤキの樹皮のほか制作工程で出たケヤキのおがくずを煮出して草木染めをする人もいて黄色やベージュに染められたスカーフやTシャツ、毛糸などの美しい工芸品をつくり見せてくれた。「これだけ素晴らしい色が出たのは500年も生きていたからこそ。」「染めた服を着ると子どもの頃から見ていた大ケヤキに守られているように感じます。」と微笑んでいた。

またマンガ家の比古地朔弥さんはエレガンス・イヴという漫画雑誌に『この町の大きな木』というタイトルで、木が腐り樹医さんによる診断、市と地元市民とのやり取り、伐採の課程などに加え登場人物達のケヤキへの思い、草木染めや、時計、オブジェ、そしてこの再生造形のことなどドキュメント風に描き好評を得ている。

地元の浦和西高校の学生等がケヤキを利用した彫刻に挑戦し力作を作り出し学校行事のケヤキ祭りでは作品を展示した。浦和高校の学生達は彫刻・立体造形の美術鑑賞のレポートを提出してくれた。また埼玉大学教育学部附属中学校の15名の生徒は先生の引率で来て作品を色々な方向から見て、感想や思いを自由に作者に投げかけていった。その後木彫鑑賞の研究授業を2年3年の5クラスで行い、文部科学省の調査官も参観され大変好評であった。

## 造形のプロセスの確認

ここで具体的な制作の内容、及び制作者としての心情を含め列記します。

- ① 大ケヤキには女神が宿る…。昔女神ありきと遠野で柳田国男が感じたように私は大ケヤキの木を見たとき深い思いを感じた。だから切り倒されたケヤキに木表から女神のデッサンを朱墨で入れ始めた。木表いっぱい一人の女神を丸く大きく大幅の筆で一気に描き込んだ。豊穡の女神のような、量感の豊かなボリュームの美しい女神に、平ノミを早速入れ始めていった。
- ② 木裏にも後ろに背を反らせて円相図のように手足を丸く形を繋ぐように描き切った。一緒に内部の腐れを取り除くように空洞を彫り始めた。内へ内へと彫り込むことでソリッドにえぐるように線から穴へと形を変える。奥へ奥へと貫通を予感するように、内丸と深丸の大ノミでドンドン彫り込んでいった。
- ③ 左側面では長年の落雷で黒焦げに焼けた部分が多く木の形が変形し凹凸が強かった。長さは十分あるので、横たわった女神のデッサンを入れた。しかしここではキュビズムの描画で、もう一つお腹が最大限に膨らんだものを同時に描き込んだ。胎内に子供を感じさせる量感が表現できた。このデッサンの作の中で一番レベルを見せるところで、何度も何度も描き込んで消し、また反りの稜線<sup>そ</sup>で顔、腕、背中、尻、腹部、腰、大腿部、下脚とデフォルメを十分に入れてキュビズムの手法を駆使した。この作品はここが勝負と意を決した。これに従って平刀、深丸、中丸、浅丸すべてのノミを使用して造形の変化、カービングの特徴を出していった。
- ④ 右側面は四面の最後であるが、この部位を残して置いたのは鬚空<sup>ひだもく</sup>が一番多く、美しさが元々ある面だからだ。よって鬚空のあるところは最大限手をつけずその空いた何もない空間にどのようなモチーフを入れるか悩んだ。手を出せない日は何日も続いた。子ども家庭センターに設置することが将来構想で浮上し始めた頃である。体を前のめりにして手を挙げて母親を求める子共の図と右の大きな材のボリュームを活かした母の後ろ姿を組合せ、絶妙な構図をようやく決めることが出来た。子供の彫りは素朴に、母親の後ろ姿は量感をもって母性の大きさ暖かさを表現した。
- ⑤ 四面のデッサンが出来上がり連続して荒彫り中彫りが進行した。木の楕円形の有機性を



考えデッサンを加筆し、彫刻が立体として 360 度つながるよう進めていった。

- ⑥ 十文字切りによって四角に開いた穴も有機的形態となり中彫りが終了した。穴は子供なら楽にくぐり抜けることが出来るくらいのもので、造形的には空間の美しさを感じるぎりぎりの微妙な大きさである。完成が近づくにつれ市の関係者の見学も多くなり「この穴はこのまま残るのですか?」と心配された。公共の空間に置く場合の事故や、破損を考えると悩みに悩んだ末穴をふさぐ決意をした。このケヤキの使われていなかった梢の部位にも雷が落ちたときの小さな空洞があり、その梢で楕円球体を彫った。寸分の隙間も無く本体にスッポリとこの球体を収めて、子供が通り抜ける心配も無く、根元と梢が一体となったモニュメントは造形的にも美しく完成するに至った。

## おわりに

細部の細かい彫り仕上げをして最終的に彫刻『風の記憶』は寸法幅 220 × 奥行 205 × 高さ 200 cm, 約 2.5 トンの重量で完成した。2011 年 11 月 12 日に文化庁の地域活性化事業の一環である SMF アートラボが埼玉県立近代美術館で開かれ、その広場で『風の記憶』は披露された。作品の披露と共に公開制作時のようにケヤキ樹皮を使ったワークショップを行った。子ども達の豊かな発想で「見立て」の遊びが盛り上がり、ペンダント・ブローチ・置物等にして持ち帰り地域家庭との文化交流となった。この場にアート・コラボレーションとして参加していた若い前衛舞踏家が突然引き寄せられるようにケヤキの周りから穴の中へと踊り始めた。舞踏と彫刻の絶妙なコラボレーションに観衆から多くの拍手がわき上がった。



ケヤキの樹皮を使ったワークショップ



前衛舞踏家とのコラボレーション

皆が愛し続け、懐かしい大ケヤキの記憶を閉じ込めそれを再現してオブジェとなったモニュメ

ントをどこに設置するかは制作中から大きな問題であった。既存の公共の建物には大きさと重さから設置は不可能…。そこで設計する時から展示を考慮出来る新設の建物に、ということになった。丁度さいたま市は公開制作の会場であった広大な大原中学校の跡地に「子ども家庭総合センター」を建設することになり、この大ケヤキはこの地元の公共の建物に設置すべきという地元の方、ケヤキ対策委員会の方々などの要望が高まり終始支援を頂いた元市議の福島正道氏の夢と共に遂にセンターのモニュメントとして置かれることが実現した。

完成した作品をいかに効果のある設置をするかは、プレゼンテーションの方向から考える必要がある。作者と展示専門家である丹青社のスタッフで展示計画を練り上げた。建物の工事の進行を見計らってバンコに代わる強固で安定した台座を造りその上にクレーンで運び込んだ。人々の動線と作品の見せ方、正面性をどこに決めるかを考え、ロビーの空間にどの方向で展示するかを決めた。野外に仮置きしていたため傷みや汚れが目立つようになりそれらを修正や補修して2018年4月1日「さいたま市子ども家庭総合センター」のオープンと共に1Fのロビーに設置され一般の人々に公開された。近くには制作ノートやスケッチブック、写真などの制作過程のドキュメントを置くコーナーも設けた。

2010年6月に始まり2011年11月までの公開制作の期間、数え切れない支援を頂いた。原木の玉切りや十文字切りで大型チェンソーを使いみごとに切ってくれた山岸木材さん。鳴海テントは制作中雨に濡れないように、作業も出来るようにと無償の協力で大形のテントを張ってくれた。大風の後には張り替えたりとメンテナンスもしてくれて大変助かった。造形のプロセスで終始写真を撮って記録を残してくれた大熊さん。公開制作のスケジュール表を作って区、町内に配布してくれた五月女さん。上木崎小学校PTA広報委員会「しらさぎ」、青少年育成上木崎地区会広報部「けやき」、中央図書館などの「さいたま来（らい）ブラリー通信」、埼玉新聞社などの新聞各社、NHK・テレビ埼玉などのテレビ局の取材と報道等々。ケヤキ対策委員会、さいたま市まちづくり推進部。ボランティアで片付けや掃除などを手伝ってくれる方々。子ども家庭総合センター開設準備室室長やスタッフの方達。多くの人達の協力があって初めてなし得たことだと思う。

最後に約300年前にこの地に入植した開拓民の子孫でケヤキ対策委員会の会長田中博さんは「ケヤキの無い風景にまだ慣れない。今でも墓参りでご先祖様に伐採の報告を最初にします。モニュメントが完成し、心の区切りが出来ました。地元の子ども家庭総合センターに収まり時折見に行くことも出来、地域の住民の絆づくりの大仕事をしてくれました。」と述べている。この“子ども家庭総合センター”は子どもと家庭をとりまく課題に総合的に取り組み、地域の子育て機能を支援するために設置された。子どもの総合相談、専門相談から中高生、30代の成人前期の若者までの悩みや相談に対応しているほか、企画・研究機能なども有している。世代間交流の



できる場でもあるロビーにおいて、再生造形された大原大ケヤキはモニュメントとして地域のアートとなり活かされることとなった。

#### 参考文献

- ハーバード・リード「彫刻とはなにか」——特質限界 日貿出版社  
岡田隆彦「現代の美術 2 幻想と人間」講談社  
東 珠樹「近代彫刻・生命の造形」美術公論社  
本郷 新「彫刻の美」中央公論美術出版  
本田貴侶 拙論「彫刻」——美術指導資料 開隆堂  
現代彫刻懇談会 編集「世界の広場と彫刻」中央公論社

(提出日 2018 年 9 月 25 日)